季刊

BEST DOCTORS IN JAPAN™

第34号 2016年 7月

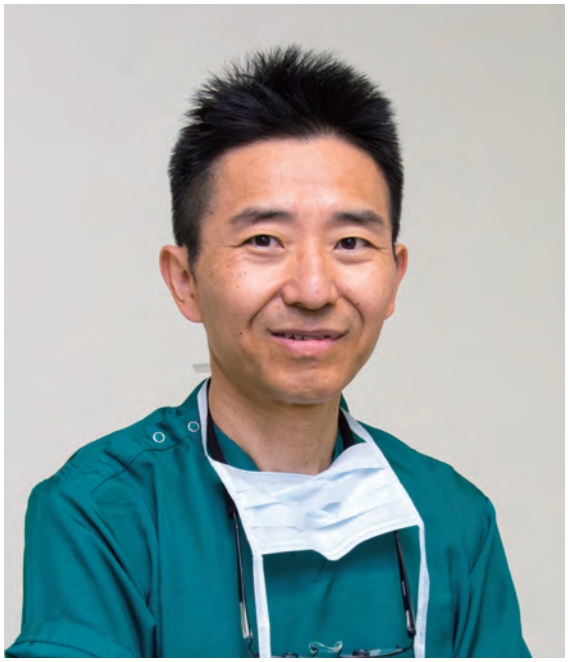
今月のベストドクター

広島大学腫瘍外科教授

岡田 守人

「ハイブリッドVATS（バッツ）」「根治的区域切除術」で、患者さんに優しい手術を目指す

肺がんに長尺クーパーで闘い続けて20数年。広島大学腫瘍外科教授の岡田守人先生に、自ら開発した術式「ハイブリッドVATS」、「根治的区域切除」の意義、専門医を育てる教育の大切さなどを伺った。



広島大学腫瘍外科教授
岡田 守人 おかだ・もりひと

1988年奈良県立医科大学卒業。同年神戸大学医学部第2外科入局。兵庫県立淡路病院外科、兵庫県立がんセンター呼吸器外科勤務を経て、95年神戸大学院医学研究科修了。99年米国コロンビア大学（胸部心臓外科）研究員。兵庫県立がんセンター呼吸器外科長を経て、07年より広島大学原爆放射線医科学研究所腫瘍外科教授、同大学院医歯薬学総合研究科腫瘍外科教授、同大学病院呼吸器外科教授。環境省中央環境審議会専門委員。Active member of AATS(American Association for Thoracic Surgery)、 Active member of ASCO (American Society of Clinical Oncology)、日本呼吸器外科学会理事、日本肺癌学会理事、日本外科学会代議員、日本胸部外科学会評議員。ハイブリッドVATSと呼ばれる低侵襲な肺がん手術の開発者として知られ、根治的縮小手術（区域切除）を積極的に行っている。

胸腔鏡手術と開胸手術の「いいとこ取り」

肺がんは、罹患率、死亡率ともに高く、日本だけでなく世界的にみても難敵である。この手ごわい相手に対し、岡田先生が手にする武器が長尺クーパーだ。約30cmの医療用ハサミを「逆さ持ち」という師匠直伝の握り方で自在に操り、病巣に挑む。

「ハサミを持つとき、通常刃先の向きは向こうですが、逆さ持ちでは自分のほうを向きます。この持ち方だと脇が締まり、ブレを防げます。また長尺クーパーは刃先が短いので、手指を大きく動かしてもテコの原理で刃先の動きはずっと小さくなります。胸腔内でミリ単位の精密な動きが可能になりますし、刃先に生じる力も強くなります」

岡田先生はこの持ち方で、肺がんの手術に臨む。最も得意とするのは、自らが開発した「ハイブリッドVATS（バッツ）」による区域切除だ。

「VATS（Video Assisted Thoracic Surgery）」とは胸腔鏡手術のこと。「ハイブリッドVATS」では、胸腔鏡を使いながら自分の目でも病巣を見る。小さな傷で治療できる胸腔鏡手術と、肉眼で病巣を直接見ることが

総回診は毎週水曜日。各患者さんの担当医と岡田先生が病室を回って、患者さんの様子を伺う。

でき、時には触れて腫瘍の位置を確認できる開胸手術との「いいとこ取り」をした、患者さんに優しい画期的な手術方法だ。

肺をいかに温存するか

近年、画像診断の進歩や検診の普及により、がんが非常に早期の、小さいうちに見つかるケースが増えている。しかしその一方で、発見されたときにはかなり進行している患者さんも多いのが現状だ。肺がん治療は今なお苦戦を強いられることも多い。早期・進行がんいずれにも効果があるだけでなく、術後のQOL（生活の質）を保て、かつ侵襲性の低い治療の工夫が重ねられている。

「低侵襲とひと口に言っても、その中身はふたつあります。ひとつは、肺をいかに温存するかです」と岡田先生。切除範囲を大きくすれば、がんの再発率は低くなるが、患者さんの肺活量は損なわれる。病巣のある部分をできるだけ小さく切除して肺活量を温存すれば、術後の運動能力も保たれる。現在、国際的な標準治療は「肺葉切除」だ。しかしより小さながんも見つけられるようになったため、切除範囲を小さくする縮小手術も増えている。「縮小手術には、楔状切除と区域切除のふたつがあります。楔状切除は部分切除ともいい、病巣だけを取り除きます。30分程度で終わる簡単な手術です。一方、区域切除は肺葉切除と同じように肺動脈・肺静脈・気管支を露出、さらに末梢の細かいレベルまで剥離させ、余裕をもって病巣を切除したうえでリンパ節郭清も行います」。細かい作業が必要なので、肺葉切除より難しいという。

切開創をいかに小さくするか

「低侵襲のもうひとつは、体に開ける傷をいかに小さくするかです」。筋肉や肋骨を切らずに病巣に到達する、つまりアプローチにおいていかに侵襲を減らすか。傷が小さければ手術後の痛みも少なく、入院日数も短

病状をていねいに説明しながら、患者さんの不安を取り除いていく。

モニターを眺めながら若い医師に指導する岡田先生。

縮される。社会復帰が早まり、患者さんのQOLの向上にもつながる。

ハイブリッドVATSは、肺機能温存と低侵襲アプローチの両方を可能にするものだ。「そもそも肺の手術では切除した肺を取り出すために3～4cm程度の傷は必要です。そこから腫瘍に手で触れることもできるし、胸腔鏡だけに頼らず肉眼で直視することもできます」。モニター視のみの胸腔鏡下手術では難しい細かい作業も、モニター視と直視を組み合わせたハイブリッドVATSなら、大きく開胸することなく腫瘍を摘出できる。難度の高い気管支形成術や複雑な区域切除にも対応可能だ。また、通常の胸腔鏡手術に比べて胸部に開ける傷の数も少なく、必要なのは切除した肺を取り出

手術風景。肉眼による直視とモニター視を組み合わせる。

すための4cm程度の穴と胸腔鏡用の穴1cmの計ふたつだけ。出血もほとんどないという。また、通常の胸腔鏡手術ではリンパ節転移のある進行がんなど根治性が損なわれる症例も少なからず存在するが、ハイブリッドVATSではそのような症例でも開胸せず治療できる。

脈々と引き継がれる手技

岡田先生の業績は国際的にも評価されている。『ピアソン胸部・食道外科（Pearson's Thoracic& Esophageal Surgery）』は、胸部外科を学ぶ者にとってバイブルのような教科書だ。ハイブリッドVATSと根治的区域切除は、その冒頭「胸部外科手術の歴史と発展」の章で、「Okada and colleagues」の名とともに掲載されている。日本人の名が記されたのは初めてのことだ。

「この教科書の編著者であるピアソン先生とはご縁が深いだけに、うれしかったです」と岡田先生の顔に思わず笑みが浮かぶ。ピアソン先生との縁は、岡田先生に長尺クーパー逆さ持ちを指南した坪田紀明（つぼた のりあき）先生との縁に始まる。

岡田先生が坪田先生と出会ったのは、医学部修了後3年目の研修先兵庫県立がんセンターでのことだった。当時、心臓外科に憧れていた岡田先生が研修先として希望した循環器病センターは定員が1名しかなく、希望者がもう1人いた。2人はジャンケンをして、若き日の岡田先生が負けてしまった。運命のいたずらにより、しぶしぶ勤務することになった先にいたのが、厳しくて怖いと評判の坪田先生だった。「本当に厳しく指導されました。でも坪田先生は手技がものすごいのです。クーパーを使った鋭的で見事な剥離手技にすぐに魅了されました。先生から叱られ、教えられたことは非常にありがたかったと今はひしひしと感じます。私にとっては真のメンター、指導者としてのお手本です」

その正確で的確な手技は、坪田先生がカナダ・トロント大学の胸部外科に留学していたとき、『ピアソン胸部・食道外科』のピアソン先生から学んだものだった。つまり、岡田先生はピアソン先生の孫弟子にあたる。

この日行われたのはハイブリッドVATSによる右上葉切除。病巣を肉眼で直視しながらクーパーを自在に操る岡田先生。

数年前に来日して岡田先生のクーパーさばきを見たピアソン先生が、坪田先生に「若い時に教わった師匠のベルシー（胸部食道外科の父といわれる）と同じだ」とつぶやいたという。脈々と引き継がれる技が医療を支え、未来へと生かされる。「たまたま決まった研修先。そのおかげで今があります。ピンチはチャンス。人生ってそんなものかもしれません」

「完成は永遠の未完成」

2002年、留学中の岡田先生に、帰国するようにとの便りが届く。坪田先生が兵庫県立がんセンターの院長になって最前線から退くのを機に、現場を担い、メスをふるう指揮をせよとのオファーだった。妻と2人

カンファレンス風景。約30人の患者さんの病状や経過などの情報をスタッフ全員で共有する。

の娘をニューヨークに残して単身で帰国。呼吸器外科の責任者になり、手術件数も増えた。「ハイブリッドVATS」はこの時期に生まれ、育っていくことになる。

そして07年、43歳で広島大学の教授に就任した。大学に来て手術執刀数は減ったが、教育の機会を与えられ、指導者としての役割の大切さに気づかされる。今では呼吸器外科だけでなく、外科学、さらに大学病院や医学部で学ぶすべての研修医や学生たちに向き合う日々だ。

岡田先生は「完成は永遠の未完成」を好きな言葉に挙げる。「1年前の自分と比べたら、今のほうが手術がうまくなっています。つまり私もいまだ発展途上ということです」。通常の手術であれば、経験の浅い研修医と手術がうまいとされるベテランとは一般に思われているほどの差はないと岡田先生は話す。「私自身も進歩していると思えるのは、一人ひとりの患者さんの手術を通して課題を見つけ改善を心がけているから。自ら学ぶ・反省する・変わることが必須で、いつまでたってもゴールはないと思います」

指導者として懸念していることもある。今の若い医師は「VATSの世代」だ。結核や炎症に侵された難しい肺にメスを入れたり、血まみれになりながら肋骨を切り、大きく開く拡大手術をやってきた世代に属する岡田先生とは違う。彼らは難しい手術をやりたがらない傾向があるという。「出血はないほうがいいに決まっています。でも、血まみれになってもやり遂げ、患者さんを救いたいという情熱・勇気は大切です。誰もが手術は怖いのです。臆病になって欲しくありません。難しい手術にも挑戦を、と若い医師に向けた講演でよく言っています」

長尺クーパーの逆さ持ちを実演する岡田先生。「こうして脇を締めるとグラつかないんですよ」

患者さんの望みに勇気をもって応えたい

外科医として心がけているのは、自分が患者だったらどうして欲しいかをいつも考え、その治療に挑むこと。「エビデンス上、手術はできないと考えられるようなケースでも、10にひとつでも可能性があって、患者さんが望むなら、私は積極的に応えたいです。例えば、手術して欲しいと希望しているのに断られ続けている進行がんの患者さんがいるとしましょう。危険な手術をしてもすぐに再発したり、手術によって亡くなる時期をかえって早めたり、患者さんに辛い結果をもたらすこともあるかもしれません。それでも完全切除の可能性がある場合、患者さんが望むなら全力で挑みたいと思います」

岡田先生にとって名医とは何か、と伺ったところ「患者さんの身になって治療方針を決められること。剥離や縫合の技術を磨くことも大切だが、診断であれ、手術中であれ、患者さん側に立って冷静に判断できる医師」という答えが返ってきた。

教授室には、手術中の先生の写真と、娘さんが描いた絵がたくさん飾られていた。

2002年に岡田先生が帰国した後も、家族はニューヨークに残っている。妻は血液内科医でがんの研究者。よき伴侶であり、よきライバルだ。まだ幼かった2人の娘を育てながら、仕事に励む姿には岡田先生も鼓舞されたという。「日本では共働きの家庭なら当たり前のかぎっ子は、アメリカでは許されず、シッターが必要です。そんな子育て事情のなかで働き続けるのはとても大変だったはず。でも女性としては、アメリカにいるほうが日本にいるより伸び伸びと仕事に没頭できるのでしょうね。いつの間にか娘も大きくなってしまいました」と笑う。今でも年に数回は家族で会い、インターネットで連絡をとり合っているという。「娘には日本人としての誇りや日本文化への理解を忘れて欲しくない。日本の素晴らしさや伝統をきちんと教えて伝えたい。家内も同じ考えで、アメリカでも正月は手作りのおせち料理や習字など、奮闘していますよ」

現在、岡田先生は学会や会合などで広島と東京を週2往復することもあるほど多忙を極める。体力維持の秘訣は、ジムに通って泳ぐこと。直近の体脂肪率は7.2%。患者さんにとって最善の手術を追い求める岡田先生。スリムでしなやかな体にみなぎるエネルギーは計り知れない。

岡田先生と腫瘍外科スタッフ。緊急手術などのため、集まれなかったスタッフも約半数いた。

日本におけるベストドクターズ・サービスはBest Doctors, Inc.ならびに同社の日本総代理店である株式会社法研により運営されています。

● ベストドクターズ社について

ベストドクターズ社（本社：米国マサチューセッツ州ボストン）はハーバード大学医学部の教授2名により、「病に苦しむ方々が最良の医療を享受できるように」との理念の下、1989年に創業しました。弊社は現在、本社のある北米をはじめ、中南米、ヨーロッパ、オセアニア各国で事業を展開。日本には2002年に進出し、重篤な疾患で苦しむ方々への「ベストな医師＝Best Doctors in Japan™」のご照会を柱に活動しています。

● 株式会社法研について

法研は1946年に設立され、社会保障の情報発信事業を起点にその領域を拡大し、健康・医療・社会保障をはじめ、年金・介護・福祉など幅広い分野で良質な情報・サービスを提供してまいりました。永年にわたり培われた信頼と実績をもとに、みなさまの「健康寿命」の延伸と「クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）」の向上を積極的に支援しています。

ベストドクターズ記念楯

ご選出記念楯へのお問い合わせを多々たまわり、誠にありがとうございます。予想を超えるご反響をいただき個別のご案内が難しい状況のため、本誌にて概要をご案内させていただく運びとなりました。

お問い合わせ、ご購入につきましては、お手数ですが、下記メールアドレス宛にご連絡ください。折り返しご案内をお送り申し上げます。なお、記念楯は過去の年度（2012-2013、2010-2011、2008-2009、2006-2007）のものも別途お承り可能です。

【仕様】木目調枠 縦約33cm×横約28cm 重さ約1kg 【価格】2万8,000円※（送料・税込）
【納期】お申し込み後8週間程度
※氏名欄に記載する肩書き、学位は「Dr.」「M.D.」「M.D., PhD.」等からご選択いただけます。

e-mail：bd-tate@bestdoctors.jp（bestdoctorsには末尾に「s」がつきます）

Best Doctors, Inc.（ベストドクターズ米国本社）
60 State Street, Suite 600, Boston, MA 02109 USA
Tel: +1(617)226-3666

ベストドクターズ社（Best Doctors, Inc.）は、1989 年にハーバード大学所属の 2 名の臨床医によって設立されました。今日では、世界 30 カ国、3000 万人以上の方々に、おもに生命保険会社、損害保険会社、企業等を通じてご加入いただいております。

Best Doctors、star-in-cross ロゴ、ベストドクターズ、Best Doctors in Japan は米国およびその他の国における Best Doctors, Inc. の商標です。

本誌は著作権法上の保護を受けています。本誌の一部あるいは全部について、株式会社法研および Best Doctors, Inc. から文書による許諾を得ずに、いかなる方法においても無断で 複写、複製、転載することは禁じられています。

ベストドクターズ社日本総代理店 株式会社 法研
〒104-8104 東京都中央区銀座 1-10-1 Tel.03(3562)8404